

---

# 夏の欠片

林檎飴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夏の欠片

### 【Nコード】

N8465M

### 【作者名】

林檎飴

### 【あらすじ】

小学生達が肝試しをやるうとやっている最中に霊が……。そして迷ってしまい村に辿り付くその村で起こる事とは？

## 恐怖の始まり

### 【5・3教室】

僕は、石崎 潤<sup>イシザキ ジュン</sup> 11歳で性別は男「もう明日で夏休みになるから計画を立てようと思っっている。」

って計画といっても思いつかないなあ…。」

「よおッ！」

石崎「お！この声は！」

「なんだなんだこの声はって、声聞いてわかるだろ俺の名前は橋本<sup>ハシ</sup> 講<sup>コウ</sup> 11歳の男だぜえ！」

石崎「ちようどよかったよ 夏休み2人でどこか行かない？」

橋本「おう！ いいぜ！」

……………。

石崎「計画って考え付かないなあ。」

橋本「そうだ！肝試しとか花火大会とかやらねえか？」

石崎「お！ そうだなあ じゃあ決定で！」

橋本「おう！」

「ちよつとちよつと私も入れてくれないかしら？」

「私も入れてほしいな。」

石崎、橋本「お！ お二人さん。」

雨倉「私、最初に入れてといったほうは11歳の女の子の雨倉<sup>アマクラ ミナミ</sup> 南だよお。」

小松「で、その次に入れてといったのがまだ誕生日を迎えていない10歳の女の子 小松<sup>コマツ ミカ</sup> 美夏です。」

石崎「メンバー4人までもう締め切り！ もう終わりです。クラスみんな「え〜〜〜！。もうチョット入れて！」

石崎「場所変えようか…。」

3人「うん…。」

### 【中庭】

石崎「さてここなら静かだしいいね。」

3人「そうだねえ」

橋本「リーダー決めようよ」

石崎、雨倉、小松「OK！」

3人「始めた石崎君がいいと思います。」

意見はすぐ決まってしまった。

石崎「リーダーとしてがんばります。後、明後日の朝ここに集合ね。」

3人「OK！」

(チャイム) キーンコーンカーンコーン

4人「そろそろ帰ろうか。」

そして学校は夏休みへと入った。

そして待ち合わせの時間。

一番に来たのは雨倉だった。

雨倉「石崎君、待たせないでよ」 しっかりリーダー。」

石崎「ごめんごめん ちよつと寝坊して」

三番に来たのは橋本 そして小松

石崎「よし全員集まったね。」

石崎「じゃあ、いきなりだけど朝から肝試し。」

3人「OK！」

石崎「とある駐車場を紹介するよ そこは昔5歳児の男の子が事故にあつた場所らしい。」

3人「怖くない? 呪われたりしないよね。」

石崎「多分大丈夫だと思うが…。」

駐車場到着

【駐車場】

石崎「こんな空気じゃ出そうにないなあ。」

橋本「あなああ」

雨倉「ほんとに幽霊なんているのかなあ?」

小松「早く帰ろうよ。」

石崎「小松が帰ろうって言うから帰ろうか？」

3人「うん」

と、帰る　その時だった

「えーん　えーん」

ちようど5歳児ほどの子供の声がした。

橋本「これはやばいんじゃないか？」

と、みんなで橋本方を見ると、なんと橋本は見た事もない血だらけの5歳児の男の子を背負っていたのだ！

小松はギャーといって駐車場を駆け出していた。

小松に続いて雨倉も逃げ出した。

今度は僕、石崎　潤も逃げ出そうと思ったのだが、橋本が肩を掴んできたので僕は逃げられなかった。

石崎「やめてよおッ！」

橋本「いいか、離すから逃げないでくれ」

石崎「わかったから離して」

パッ　手が離れた。

僕はそのまま少し離れて倒れこんでいた。

気付けば僕は駐車場に一人で倒れこんだままだった。

夜だし、暗くて何も見えなかった。

石崎「誰かいますかー？」

.....。

声は無かった。

立ち上がってもう一度言ってみたが声は無い。

だが　その時！

ペチャ　ペチャ　ペチャ　ペチャッ

裸足で歩くような音がする。

ペチャ　ペチャ　ペチャ　ペチャッ！

どんだん音は大きくなっていくにつれて、怖くなってきた。  
と、その時！！

????「危ないっ」

ドカツ

何かを棒でたたいたような音がした。

???「大丈夫か？」

石崎「だ：大丈夫だけど、ところで誰？」

???「声聞いてわからないか？」

石崎「うん。」

橋本「橋本 講だよ。」

石崎「お前！ お前こそ大丈夫か？」

橋本「大丈夫だ お前まで巻き込んでゴメンな。」

石崎「こつちこそ 助けてもらってありがとな。」

橋本「そろそろ帰るか？」

石崎「帰ろう。」

橋本「ラジャー！」

と、その時！！

子供の親「よくも私の子を叩いてくれたわね！」

石崎「まずい！ここでさっきの子供が轢かれて母は悲しみここで自殺をしたのだ！」

橋本「どこでそんな事を知ったのか？」

石崎「とにかくいいから逃げるよ！」

子供の親「待てえッ」

【山奥】

石崎「そうだ！さっきの棒を投げるんだ！」

橋本「やってみるよ。」

橋本「えいッッ」

バンッ！

棒は運よく子供の親に当たった。

子供の親「ウオオオッ」

2人「やったな。」

石崎「よし帰ろう。」

橋本「おう！」

2人「ここどこ〜」。

石崎「やばい迷った。」

橋本「まっすぐ行けばよかったな。」

2人「あ!!」

???「ああ!!」

2人「雨倉と小松、こんなところでどうしたんだ？」

雨倉、小松「道に迷って…。」

2人「じゃあどっちも迷ったってこと!!」

雨倉、小松「そっちも!？」

2人「うん…。」

4人「じゃあどうすんの〜」。

石崎「とにかくまわりに町があるか見てみよう。」

3人「でも、ここは山奥だし」

4人「あ! あそこに村がある。」

呪村？

【村】

雨倉「この村誰もいないね。」

橋本「ああなあ……。」

小松「あ！ あそこに家がある。」

4人「行ってみよう。」

【玄関】

ピンポン

……………。

返事がない。

橋本「こうなったら決じ開けるしかない。」

4人「せーの」

ドン！！

ドアが壊れた。

【家】

家は村の中心あたりで大きな2階建だった。

そこはごく普通の家で僕たちでもすめるような気がしていた。

雨倉「ここに住めるかもしれない。」

橋本「そうだなあ。」

石崎「住もうか。」

3人「OK！」

小松「もうお腹ペコペコだよ。」

橋本「そろそろ飯にするか」

石崎「でもここには何も無いし……。」

雨倉「村中探すわけにもいかないし……。」

石崎「今日はひとまずここで寝ることにしよう。」

小松「でもお腹ペコペコ……。」

雨倉「わがまま言わないで石崎君の言うこと聞こつ。」



小松「うん。」

## 2階【ベットルーム】

そしてみんなはベットルームへみんなが集まって寝たのでチョット暑苦しい気もした。

僕はこっそりベットルームを抜け出した。

## 1階【キッチン】

キッチンは生臭い臭いが広がっていて料理道具はほとんど錆びていて使えなかった。

その時！！

風が強く吹き何かが窓に向かって飛んできたのだ！！

窓が強く割れて大きな音がしたが、3人は気付かず起きてこなかった。

それは工事の看板だった。

「お願い ご迷惑をおかけして居ります。 工事中ご協力をお願い致します」

と書いていて、黄色いヘルメットをかぶったおじさんのところにはかすかに血が付いていた。

石崎「さて、そろそろここを出よう。」

## 【村】

村は風が強く木の枝などが辺りに散っていた。

石崎「帰り道を絶対見つけてやる。」

そして、歩いていると着物を着た女の子に会った。

石崎「おお！ こんなところに人がいたのか！！」

女の子「こんば……んわ……。」

石崎「こんばんわ。この村から出る方法はありませんか？」

女の子「無いと思うよ……。」

石崎「え？ じゃあ何でここに来れたの？」

女の子「その時はまだ道があったから……。」

石崎「じゃあ もう道は無いってこと？」

女の子「そういうことよ。」

女の子「私、用事があるから帰るね。」

女の子は煙のように消えていった。

石崎「あの子幽霊か？」

石崎「あ！空が…。」

空はもう日が出ていて朝になったばかりだった。

石崎「3人が起きてるかもしれない！」

僕は急いで家へと帰った。

家へ付いた。

【家】

僕は急いで2階へ上がった。

【ベットルーム】

まだ3人たちは寝ていたので、寝たふりをする事にした。

そして、雨倉が起きてベットルームから出て行った。

その次に小松が、そして僕もベットルームから出た。

【キッチン】

石崎「お2人さん、起きるの早いね。」

雨倉「お！リーダあーさん。」

小松「昨日の夜から何も食べてない…。」

石崎「そうだなあ。」

雨倉「つて言っても何もないよ。」

小松「じゃあこのまま死んじゃうってこと？」

石崎「そうかもな。」

雨倉「橋本君起こしてくるね。」

石崎「いやいい、僕が行くよ。」

雨倉「わかったよ。」

【ベットルーム】

石崎「橋本！起きて〜。」

橋本「うう…痛てて…。」

石崎「どうした？」

橋本「う…夢か。でも膝が痛い。」

石崎「ん？ こけた夢でも見たのか？」

橋本「うん。 そうだ。」

石崎「さあ 外にでも出よう。」

橋本「ああ。」

と、立ち上がったとき橋本の膝にはかすかにこけた跡があった。

石崎「その怪我は…。」

橋本「夢でこけた時の怪我と同じだ！」

石崎「これは悪夢か？」

橋本「そうかもなあ…。」

橋本「早く 外出ようぜえ。」

石崎「怪我はいいのか？」

橋本「ただのすり傷だ！ 大丈夫だ！」

石崎「じゃあ行こうか？」

橋本「ああ」

【キッチン】

雨倉「これから別々に行動するわよ。」

小松「怖いよ…。」

雨倉「もう、しょうがないわね！。 2人で1チームにするわ。」

雨倉「じゃあ私は美夏ちゃんと。」

橋本「じゃあ俺は石崎と。」

石崎「みなさん、夜が明ける前にはちゃんと帰ってくださいね。」

2人「はい。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8465m/>

---

夏の欠片

2010年10月9日04時44分発行